

病棟移転により問題行動をきたした重症心身障害者に対する取り組み

— 日課を取り入れて —

本田美千代* 大島純子 矢久間みゆき 山本悦子
谷口亜紀 古田道枝 河場由紀子
国立病院機構鳥取医療センター看護部 4 病棟

Approaches adopted for a patient showing problematic behavior due to ward relocation

-Assignment of daily tasks-

Michiyo Honda*, Junko Ohshima, Miyuki Yakuma, Etsuko Yamamoto, Aki Taniguchi,
Michie Furuta, Yukiko Kawaba

4th Ward, Department of Nursing, NHO Tottori Medical Center

*Correspondence:byoutou4@tottori-iryo.hosp.go.jp

要旨

重症心身障害者は、環境の変化や不適切な対応に対して持続してストレスを感じた場合、身体及び行動症状によって不安や欲求不満を表現することが多い。B 病棟では、平成 24 年 5 月の重症心身障害児者病棟の新築移転に伴い、患者の病棟編成・職員の配置替えがあり、A 氏を取り巻く周囲の環境に変化があった。A 氏には、病棟移転後より他患者とのトラブルがみられ、ストレスを抱えていると推測された。A 氏の生活に日課を取り入れることで、全体的には問題行動の減少には至らなかったが、生活のリズムを整えることの意義を再確認できた。但し、自室を離れ、デイルームで過ごしている時は、他患者とのトラブルはなかったことから、スタッフも関わるデイルームでの遊びを取り入れていきたい。鳥取臨床科学 7(1), 38-44, 2016

Abstract

When suffering from persistent stress of environmental changes or healthcare providers' inappropriate ways of addressing them, patients with severe motor and intellectual disabilities are more likely to exhibit physical and/or behavioral symptoms, and express anxiety and/or frustration. In May 2012, the patients with severe motor and intellectual disabilities, as well as the ward staff, were relocated from a previous site to Ward B. This ward and staff relocation caused changes in the environment of Patient A. Since the ward relocation, this patient has been causing trouble with other patients, based on which we assumed that the patient was subject to stress. Therefore, we assigned daily tasks to the patient. Overall, this assignment did not lead to a reduction in their problematic behavior; however, we re-recognized the importance of helping such patients to regulate their lifestyles. Currently, because the patient causes no trouble with other patients when spending time in the day room, we are planning to employ day-room activities involving hospital staff. Tottori J. Clin. Res. 7(1), 38-44, 2016

Key Word: 問題行動, 病棟移転, デイルーム, 重症心身障害者; problematic behavior, ward relocation, day

はじめに

重症心身障害児者B病棟のA氏は日常生活動作(ADL)が比較的自立しており、更衣や洗面など身の回りのことに加え、病室のカーテンの開閉や他患者に靴下をはかせる等の簡単な世話ができ、これらを日課としていた。平成24年5月の病棟移転後、しばらくは落ち着いて生活をしてきたが、半年経った頃、爪を剥ぐなどの自傷行為が見られ、その後、同室患者を押す、蹴る、叩くなどの行動が見られるようになった。病棟・病室の構造の変化、同室患者の入れ替わり、病棟看護師の配置換えなど、A氏を取り巻く生活環境の大きな変化により、常に多くのストレスにさらされるようになったことが原因として考えられた。

そこで、本研究は、A氏が心身ともに落ち着いた状態を取り戻すための取り組みとして日課を取り入れることで、どのような変化が見られるかを明らかにすることを目的に行った。

用語の定義

問題行動: 「他患者とのトラブル」, 「自傷行為」, 「腹痛の訴え」, 「物損」, 「処置の訴え」, 等の行動。

日課: デイルームの本人用スペースで過ごすこと, お手伝いをする(食事前敷物敷き, 朝の洗面道具準備, 布団敷き)。

I. 方法

1. 研究対象

A氏:

診断名: てんかん, 重度知的障害。

遠城寺式発達年齢: 手の運動は2歳程度, 基本的習慣は3歳程度, 対人関係は2歳程度, 言語理解は1歳3か月程度。

遊び: 本めくり, ぬりえ。

2. 研究期間

平成25年4月~9月。

3. 研究場所

B病棟

4. 介入方法(表1)

1) 1段階: 日課の試行

(1) デイルームに本人用スペースを確保した。

(2) デイルームに出ることを勧めた。

(3) デイルームで遊びを試行した。

2) 2段階: 日課の決定, 実施

(1) 1日の流れを決めた。

9時: デイルームに出ることを声掛けした。遊び(ぬりえ又はパズル)をした。

11時: 帰室の声掛けをした。

12時: 昼食, 昼食後にデイルームに出る声掛けをした。遊び(ぬりえ又はパズル)をした。

15時30分: 帰室の声掛けをした。

(2) 時間, 曜日毎の遊びを決定した。

3) 3段階: 日課にお手伝い追加, 実施。

(1) 1日の流れに, 起床時, 食前後, 就寝前のお手伝いを追加した。

5. データの収集ならびに分析方法

1) 調査内容: 問題行動5項目(用語の定義を参照)に関する経過。

2) 調査方法: 看護記録および観察メモ(行動観察表; 表2)により, 問題行動および日課の実施数を収集した。また, 関わったスタッフ(看護師15名, 療養介護士4名, 業務技術員5名, 保育士2名)への聞き取り調査を実施した。聞き取り調査内容は図1参照。

3) 分析方法: 看護記録及び観察メモから, 各段階の問題行動の数を集計し, 比較分析した。

II. 倫理的配慮

1. 患者の氏名, 年齢など, 個人情報を使用し